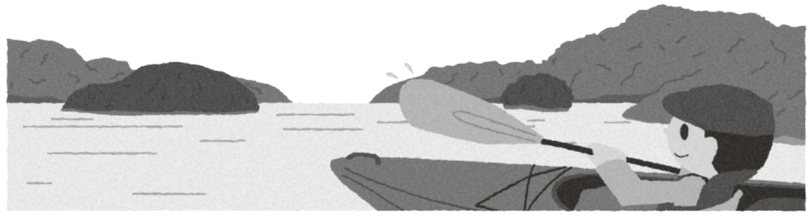
変わる日本の「暮らし」と「まち」 no.48

役割の異なる2つの商店街が新しいまちの暮らしと活気を担う

岩手県山田町・震災復興事業（2013年◆平成25年から実施中）

阿部民子
Abe Tamiko
illustration：Shigeyuki Sakata



太陽の日差しを受けて、キラキラと輝く穏やかな海面、丸く縁取られたような湾の中央には、おまんじゅうのような大小2つの島がぽっかりと浮かび、無数のカキ養殖棚が整然と並ぶ…リアス式海岸に面した岩手県山田町は、カキとホタテの養殖が盛んな、のどかな漁師町だった。その平和が一瞬にして崩れ去ったのが、2011年3月11日だ。10mに及ぶ津波が防潮堤を超えて押し寄せ、その後大規模な火災が発生。山田町全体で半数近くの家屋が被災し、犠牲者の数は800人を超えた。

あの震災から5年がたとうとする、今年2月9日。復旧が待たれるJR陸中山田駅前エリアで、1つの地鎮祭が執り行われた。この共同店舗に出店するのは、地元の大型スーパー「びはん」。まちの核店舗の移転決定で、駅前エリア整備への気運は一気に勢いづいた。

駅前エリアの構想段階から関わってきた、山田町商工会の阿部幸榮会長は感慨深げに語る。

「以前より約3m嵩上げした安心で安全な駅前に、まちの人のための商店や金融機関などを集約した『生活街』をつくり、その回りに住宅を配置する、利便性のいい『コンパクトシティ』をつくることが、まちづくりの大きなテーマでした。今回、駅前エリアのにぎやかさをつくる地元スーパーが出店を決めたことで、まちの生活基盤としての機能がようやく整いました」

これに先駆けた昨年11月、町のメインストリートである国道45号線沿いにオープンしたのが、「新生やまだ商店街」だ。

岩手県沿岸北部で初出店となるセブン-イレブンを始め、写真店や理美容店、飲食店などすでに賑わいを見せている。他店舗は、今後順次オープンしていく予定だ。

「うちの商店街は、国道を通る人たちが山田町に立ち寄り、滞在してもらう『入り口』としての役割を担いたい。役割の違う2つの商店街があってこその山田町だと思っています」と、新生やまだ商店街協同組合の昆尚人理事長は言う。

これら2つの商店街が共存するためのキーマンとなったのが、びはん株式会社の間瀬慶蔵専務取締役だ。もともとの国道45号線沿いから駅前エリアへの店舗移転を果たすとともに、新生やまだ商店街にはセブン-イレブンを出店。双方の商店街繁栄への道を拓いた。

「約3m嵩上げする駅前エリアは、今後災害公営住宅が完成するなど人口が増えますが、そこから国道45号線に出るには帰りに坂を上ったり、遠回りをする必要があります。移転は、その方々の利便性を考えてのこと。将来、ここでしか買えない物とか、逢えない人など山田町ならではのオリジナリティを積み重ね、PB商品の拡販や他地区への出店なども手掛けて山田町へ還元していきたい」と胸の内を語る。

ソフト・ハード両面でまちを支援

山田町の商店街再開に向けての大きな支えとなったのが、UR都市機構だ。山田復興支援事務所の中平眞裕は語る。

「URは震災直後から町と手を組んで復興まちづくり支援を続けてきましたが、私が赴任した24年度は住宅再建が最優先課題でした。しかし、なりわいの再生も含めた生活再建をしなければ復興とは言えません。そのためにソフト面からも支援する必要性がありました。25年度からは都市計画などの足元固めから補助金申請に係る協議・図書作成に至るまで、地元のみなさんのご意見を聞きながら、ソフト面のサポートにも関わってきました」

右側中程が盛土された駅前商店街予定地。
その奥には災害公営住宅が建設中。

「とにかく自分から話しかける」という姿勢でまちの人たちの中に入りこみ、誰が何を望んでいて、何をしたいかを聞きとり、ときには行政とのパイプ役も務めてきた。

「段差と距離のある2つの商店街の間に公園を配置して人の動線をつくり、1つの縦長の商店街にすることも提案しました。工事関係者などがいなくなる復興事業後の人口減を見据え、身の丈に合った商店街を作らなければいけないなどの意見になかなかご理解いただけなかったこともありますが、何度も話し合い、理解していただきました」

山田町水産商工課の甲斐谷芳一課長はこう言う。

「URさんには、まちの基本構想づくりからサポートしていただいきました。経産省の『津波・原子力災害被災地域雇用創出企業立地補助金』の書類作成、補助金供出の前提となる『まちなか再生計画』づくり、さらには補助金の受け皿となる株式会社設立まで、すべて一緒に苦労していただいた。名実ともに、山田町のパートナーです」

支える人とともに復興の道へ

山田町には、URのほかにも、心強いサポーターがいる。その一人が、椎屋百代さんだ。大分県出身で、14年ほど前に山田町に転居。現在は新生やまだ商店街協同組合の事務局長と、びはん株式会社の地域連携推進室を兼務、まちのために奔走する毎日だ。

「今回『びはん』が移転する駅前商店街は国道45号から見えないので、国道を通る人にも来ていただけるよう、2つの商店街共通のポイントカードをつくったり、中間点となる公園でのイベント開催などができたら、と両商店街をつなぐ秘策を模索しています。しがらみのない私がパイプ役になって、互いが直接言えないことを伝える役になれるといいですね」

総務省復興支援員制度による、やまだ復興応援隊の若田謙一さんは静岡県の出身。同じく山田町の復興に尽力している一人だ。

「震災前から、個々の店舗で商売を行ってきたが、これまで組織化されていなかった商店街の方々が、震災を機に組織化して勉強会をするようになった。この変化は第一歩であり、今後皆で共ににぎわいを取り戻せるように、サポートして行きたい」と語る。

一度外に出たことで、山田の魅力を再認識した若者もいる。シーカヤックスクール「ジオトレイル」代表の川村将崇（23）さんだ。

「外に出て、山田の海の美しさに改めて気づきました。シーカヤックは、波が穏やかな山田湾でこそ楽しめるスポーツ。山田町のよさをより多くの方に知ってもらい、今後はエコツアーなども企画し、まちを訪れるきっかけをつくれれば」と語る。

いまだ大型重機が走り回り、土砂を運ぶベルトコンベアが動く山田町。その一方で、9月には駅前スーパーと商店街のオープン、災害公営住宅の完成、町民が何よりも楽しみにしている秋祭りと、うれしい行事が続く。目に見える形で着実に、復興への歩みは進んでいる。

街に、ルネッサンス
UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社